

て中山傳信錄に在り、可見、皆我東方、南島志曰、周廻七十四里、是據此間里數而言、凡六尺爲間、六語音耳、其繁沓を以て爰に復記さず、南島志曰、周廻七十四里、是據此間里數而言、凡六尺爲間、六語音耳、其繁沓を以て爰に復記さず、去本藩慶府二百九十五里半、至北運天長濱、三百八十里、間切二十七、海港二所、村落數百、

舊說云、沖繩島者、即沖之島といふ事なり、日本紀火々出見御歌に、沖津島鳧著島と詠じ給ひしより出たり、繩は之の音の轉せしなり、今按、繩今の那覇是耳、沖といひ繩といふ、本是兩地の名合而沖繩といふに似たり、

一説云、倭急耶とは沖掖玖の略言なり、即古之所謂掖玖にして、而後今の馭謨郡益救に分て沖といふなり、今按、沖之島轉じて沖繩といひ、沖繩方言沖屋といふ、而其倭奴のごとき、又沖之の略にして、國史以て掖玖と云、即南島志所謂、其路所由と、是今の屋久島、南島の中、此方地に密迹す、當時南島地名未詳、其端島の名をもて各島を混じ稱する耳、於是流求をもて沖屋久といひしに似たり、然其據る所未審なることを考がたし、

〔唐大和上東征傳〕廿一日、戊午、○唐天寶十一年十一月第一第二兩舟同到阿兒奈波島、在多禰島西南、

〔長門本平家物語〕四少將は都にてさつまがたへと聞給ひしかば、さもやはと思給けるに、九州のうちには有ざりけり、誠に世の常の流罪だにかなしかるべし、まして此島の有様傳聞ては、各もだえこがれけるこそむざんなれ、○中さつまがたと總名也、きかいは十二の島なれば、くち五島は日本へ隨へり、おく七しまはいまだ我朝に従はずといへり、白石、あこしき、くろ島、いわうが島、あせ納、あせ波、やくの島として、るらぶ、おきなば、きかいは島といへり、

〔倭訓栞〕中編三うるまのしま 琉球をいふといへり、蠻國にさうるまあり、袖中抄などにも、いづくともなし、

〔狹衣一〕下こはいかにかとよ、うるまのしまの人とおぼえ侍るかな、

〔狹衣下紐一〕こはいかに 引おぼつかなくるまの島の人なれやわがことのはをしらすか